# 妙の光（たえのひかり）

通刊31号 復刊6号
1992年6月25日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 ☎0256-77-2025


## 本堂前の松

妙光寺を代表する木と言えばこの本堂前の松。見学者も多く盆栽を土におろして大きくしたようだとか、能舞台の背景に描かれている松のようだとか、見事さでは新潟県一だ、いや二番だとかいろいろなことを言う。

よく聞かれるが樹齢は全くわからない。檀家で巻町舟戸の笹川五香屋さんのご先祖が奉納されたと、脇に立つ石に刻まれている。この笹川さん宅に今は弱ったが樹齢二百年を越す羅漢槙（らかんまき）もあって見事。この松も一時弱ったが排水を良くして元気をとり戻した。

他に妙光寺の境内に松は百二十本余り。直径五十センチを越す古木となると二十本。このくらいになると中が空洞になっていることが多く、ムササビの住み家となる。春の風に枝がゆれる姿、初夏の青々とした新芽の姿、秋の夜月明かりに浮かぶシルエットの姿、冬黒々した幹に白い雪をのせた姿、四季おりおりの風情がある。日本の風景を代表する木とも言われる。近年の松くい虫の被害は痛々しく、境内はさほどでないが先頃一部に薬剤注入した。さて効果の程は。

# 我れらの先祖は我れらのために
# 我れらは我れらの子孫のために

小川英爾

糸魚川市押上にある地区の共同の墓『百霊廟』を訪れた。これは大正初期、当時の村の長が百三戸の全住民を説得、村の老若男女総出でそれまでの個々の墓石を持ち寄って一基の大きな集合墓にし、昔からの遺骨約三千体を移したもの。完成した大正五年以降この地区の人が亡くなると、遺骨をさらしの布袋に入れて埋葬し個々の墓は持たない。お盆は八月十三日から十五日、どこでも見られる墓参り風景が見られるが、お参りする墓が一つで皆一緒、前には提燈がいくつも燈され大きな生花が供えられる。延べ六百人余りのお参りでローソク、線香の絶えることがない。十四日夜は盆踊り、十五日朝からは合同法要が墓前で営なまれ、終了後ゴザの上で運営の相談会となおらいが開かれる。さらに十年目毎に、関係する二十五の寺院を招いて大法要を行なうという。七十五年を経た現在、地区の人々にもすっかり定着し、他所に転出した人も埋葬を希望するが数多くなりすぎるのでお断りして、逆に転入した人で希望すれば入会金をもらって以後埋葬自由にしている。現在一九五軒の会員がいる。

三年前、妙光寺『安穏廟』の完成が新潟日報に掲載された三日後、同じ趣旨の墓が七十年前からあるとの記事が同じ日報に載り、今回見学させていただいた。市役所のご紹介でこの百霊廟を管理する霊廟会の前会長杉本甚蔵さん(67才)にお話を伺った。

これを発案した中村美樹はこの地の代々の大地主。後に糸魚川町長から県議まで務め昭和四年に死亡。その息子も初代糸魚川市長から衆議院議員も務められた。その若かりし中村美樹が百戸余りの半農半漁の寒村だった当時の押上で、家が絶えたり転出で放置された無縁墓に心を痛め、さらに貧しい村に墓地が広い土地を占めるのは忍体ない、なれば墓を統合して皆で守り、空いた土地を畑地にして解放しようと始まった。この提案に貧しい人々は大賛

成、しかしりっぱな墓を持つ金持ち連中が猛反対した。「これによって先祖は皆に供養されて喜び、子孫は余計な負担なく安心して墓が守られる」と説得、十年目にして全員が同意して寺や宗教、貧富の差別なく希望者全員が入れる共同墓が完成した。以来村内で喧嘩があると中村美樹は、同じ墓に入る者同士仲良くしろと仲裁したという。

現在は三百坪程に敷地も広がり、公園ふうにきれいに整備されて、広告看板の貸地料年三十五万円で維持運営されている。中村美樹の精神も受け継がれ、川原貞治区長さんが現会長として、大変な役だが誇りを持って務めているという。昭和五十七年には総出で大改修が行われ、その際新らたに『我れらの祖先は我れらのために、我れらは我れらの子孫のために』という碑文がはめ込まれた。押上に最も多くの檀家を持つ正覚寺のご住職をたずねると、「寺に墓はないが寺参りも講への参加もむしろ他の地区より熱心に思える」と語って下さった。

ひるがえってこの頃新らたに建てられる墓は大変りっぱになったが、悪くすると見栄を張った生きている人の自己満足になりかねないきらいがある。大切なことは祖先への感謝と精神の継承であり、やたら血筋や家柄にこだわることではない。私達の親は二人だが、二代さかのぼると四人、十代で一、〇二四人、二十代さかのぼると実に百四万八五七六人の親となる。逆に子孫が二人ずつの子供を生めば同じ数の子孫がいることになる。この世に住むお互いは皆どこかでつながり合い、ほとんどが血縁となり、互いに生かされている命という訳である。

妙光寺の安穏廟にとって百霊廟はその考え方からして大先輩となる。宣伝のつもりはないが、私は後継ぎの有無に関わりなく個々の墓も安穏廟ですめば、より大先輩に近づくことができると考える。その安穏廟もおかげさまで一基目の申し込みが満杯となった。二基目の建設が今求められている。

（百 霊 廟）

信心

# 「写経」十五回目

東京　斉藤高市さん（76）

斉藤さんは法華経一部八巻二十八品六万九千三百八十四文字の写経を続け、今その十五回目が終わろうとしているという。

角田浜で生れた斉藤さんは九才の時に両親を亡くし、弟と二人北海道の祖父の元へ引きとられていく。十三才の秋より角田浜の叔父に育てられて尋常小学高等科を卒業。会津喜多方へ左官徒弟として住込むことになる。弟は親戚のつてで北海道から九州の寺へ引きとられていった。

昭和十一年徴兵検査で甲種合格となり入営、以後終戦まで軍人として身を立てることになる。その間満州から中国へと転戦。太平洋戦争突入後はビルマ、さらにインパールへと進む。転戦中幾度か砲弾にあたり受傷するが、「命あって帰還できたのは身につけていた鬼子母神様の守護のおかげである」と斉藤さんは語る。

斉藤さんの帰還前年、大雪で妙光寺の屋根が落ちた。斉藤さんが無事帰還の挨拶に行くと、屋根の修復は完成していたが壁はまだ無残な様相を呈していた。不在中仏檀や先祖、両親の位牌等を預かっていただいたお礼の意味も含め、本堂、祖師堂の壁の塗り替え作業を奉納、完成させた。今も報恩の一端にむくいることができたと満足している。

その後東京に出てずっと左官業を営んできた。妙光寺御前様がお盆の棚経に東京に行かれる際、先代のときより斉藤さん宅に一泊される。「その夜は先祖の精霊と一家七人、一堂に会してゆっくりと御前様の法話に浸れるのが嬉しい」と、毎年その日の来るのを待ち望んでいる。

先年副鼻腔炎の手術のため入院した。空白の時間を法華経の訓読を思いたち、序品より二十八品を通読。「鼻の通りが良いので気分爽快で、一偈一句があたかもお釈迦様の説法を目に当りに受けているようだった」と言う。この時の感激を持続しようと写経が始まった。

さらにカルチャーセンターでの松原泰道師、池田魯山先生の法華経講義に欠かさず出席している。弟も九州で日蓮宗の住職となっており、斉藤さんの法華経への想いは強い。

（石田誠太郎記）

寺の動き

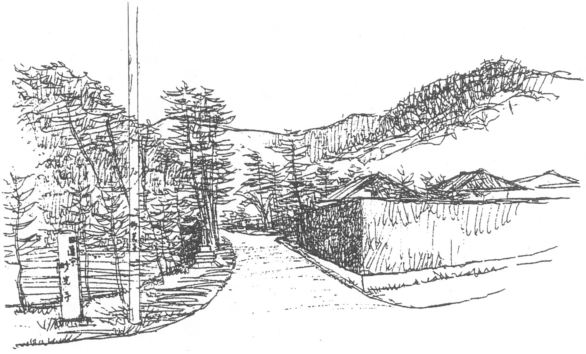
# お盆までに入口整備完成

前の号でもお知らせしましたが、これまで妙光寺への道路からの入口が主に裏門からでしたので、塀の完成にともないこれを閉鎖、今までの墓地への入口に当る所を正式な入口にしました。この新しい入口の道路拡張と一部舗装、路肩部分の植栽整備、そしてこれまで裏門にあった開創六五〇年記念塔のここへの移転を、巻町内藤利雄、三条市内藤茂造、順暉さんの三人が奉納下さいました。

さらに入口角に高さ二メートルの石塔を黒崎町小林昇、富一、竹夫、清、新潟市小林武さん五人が奉納下さいます。この石塔には特別にお願いして、現日蓮宗管長身延山久遠寺岩間日勇法主様が『角田山妙光寺』とお書き下さいました。全ての工事が七月末完成予定ですので、お盆参りには皆さんにご利用いただけます。これらによって玄関前までの車の乗り入れを規制しています。駐車場利用をご協力下さい。

新規の墓地がなくなりましたので新らたに二十区画を造成しました。これまでは永代使用料四平米十万円でしたが、工事費の値上がりで二割程上げざるをえません。正式には六月中に役員会で決定しますのでお問い合わせ下さい。山の上の墓の合同移転を考えていますが、残る無縁墓の数の多さにその方策が見つからず遅れ遅れになっています。一方で土石の崩落もあり危険な状況は変わりない点ご理解下さい。

境内のムササビのことは毎々お知らせしていますが、四月から新潟西高校生物クラブの生徒達が藤田先生の指導で観察を始めました。毎回七、八人で夕方六時から九時過ぎまで、巣穴ごとに別れてその行動を観察しています。十回程の観察でその数、行動範囲がおぼろげながらつかめてきたようです。



# フェスティバル安穏にお出かけ下さい

北海道にお住まいのGさんご夫妻が妙光寺の近くに転居を希望しておられましたが、このたび社会福祉法人新潟市有明福祉事業協会軽費老人ホーム「有明ハイツ」の夫婦居室に申し込みされました。即入居は無理ですが夫婦居室は他に待機中の方がなく、空きがでればすぐに声がかかるとのこと。ここにはもう一人、栃木県のSさんが単身者居室に申し込まれていますが、こちらは待機者が多いそうです。

この有明ハイツは新潟市内で妙光寺から車で三十分弱、公的機関の運営で同一敷地内に特別養護老人ホームや総合病院もあり、明るい雰囲気で申し分のない環境でした。そこで別紙ご案内の〝第三回フェスティバル安穏〟の講演に、老人福祉の現場から見た日本の高齢化社会の諸問題、老若ともに考える心がまえを園長さんにお願いしました。同時に医療の現場からの視点で医師の方にも講演いただく計画で準備中です。お誘い合せ多数ご参加下さい。

八月一日が檀家の人達の墓参りで早朝から賑わいます。安穏廟の法要もありますのでお近くの方お出かけ下さい。今年度分の安穏会費三千五百円を、同封振替用紙で郵便局からご送金下さい。ご持参下さっても結構です。

安穏廟が満杯となり二基目の建設を検討中です。住職の労力負担が増加するなど問題があるのですが、六月中に役員会を開き正式決定いたします。

妙光寺のある巻町は昨年度が町政施行百周年で各種行事が催されました。そのしめくくりに小川住職が実行委員長を務めたシンポジウムがあり、その場で実行委員会製作のビデオ『角田山が見てきた巻町』（V・H・S三十分）が上映されました。妙光寺は出てきませんが巻町の歴史、自然、暮らし、問題点がオリジナルの音楽とともにまとめられて好評です。ご希望の方に送料込四千円でおわけします。

寺庭から

# 平凡な悩み

何をやってもつまらない。干している洗濯物を放り出してワオーっと大きな声を出したくなる。といでいるお米をドバーッとぶちまけたくなる。夫の顔を見ただけで頭に血がのぼる。平凡で幸せな毎日の暮らしがじわじわ色あせて、自分ほど不幸な人間はいないなどと思えてくる。私はね、時々そんなどうしようもない、へんな病気にかかります。

結婚して仕事もやめて、子供なんか生まれてしまうと自分のハンコも要らなくなって、小川さんの奥さん、ヨシエちゃんのお母さんでなにもかも済んでしまうのですから。朝おきて夜ねるまで絵にかいたようなおきまりのコース。私は誰？私はなに？なんて思うのは私のわがままだと思いますか。ばかばかしい悩みなんでしょうけどね。

「徹子の部屋」という対談番組をたまたま見ます。（お昼の時間、主婦の特権です）少し前、お坊さんで、オペラ歌手、手品師、通訳をこなすという人が出ていました。墨染めの衣を着て、「踊り明かそう」を歌いながら、手品でお花や紙吹雪なんかを出していました。へえーと思って見ていると、今度はお経の話です。人間が色々な悩みに突き当たった時、それを解決するための智恵が書かれているのがお経なのだそうです。お経がインドからどのように伝わったか、という話にいたっては感動ものでした。コンサートを（もちろんオペラの）聴きに行きたいな。

たくさんの悩みや苦労を抱えて生きている私たち、クリスチャンの友人は、「その人が耐えられると思われただけの苦労を神様が与えて下さっているのだから大丈夫」だと言います。パワフルでしょ。何か不幸の原因にオカルト的な霊がどうのこうのと言うお坊さんもテレビに出たりはしていますが、そういう教えや智恵？がお経の中に書かれているのか、確かめて見たいとも思います。ホントカイナ。

いまの所私の悩みの特効薬は家族の「お母さんありがとう」の言葉かなあ。うちの住職も歌いながら手品でも見せてくれるなら元気がでるのに。あなたの特効薬はなんですか？暑い夏がやってきます。どうぞお元気で。

（小川なぎさ）

# 行事案内

**七月四日～十六日**
**東京方面お盆棚経**
例年通りに住職がお伺いします。

**八月一日（土）**
**お盆墓参り、施餓鬼法要**
午前5時半　墓経受付開始
〃　10時半　安穏廟法要
〃　11時　施餓鬼法要
昼　12時　おとき
午後1時　説　教
年々墓参りの集中する時間が遅くなって混雑します。なるべく早めにお出かけください。
各地区世話人の方が七月中に、護持会費のお願いと施餓鬼塔婆の受付けに伺います。新潟市内初め遠方の方は郵送でご案内しますので、塔婆は七月中にお申し込みの上、八月一日または後日、護持会費とともにお納め下さい。

**八月十三日～十六日**
**お盆棚経**
例年通り、住職とお手伝いの東京からのお上人が手わけして全檀家に伺います。

**八月十九日（水）**
**岩屋七面宮祭礼**
午前10時半　本堂で法要・お加持
続いて岩屋へ移動、法要
昼　12時　おときはありませんが
参詣者全員に赤飯を供養
午後1時　説　教

**八月二十二・三日（土・日）**
**第三回フェスティバル安穏**
安穏廟の供養祭。詳しくは案内書がありますのでそちらで。

**九月二十三日（水）**
**秋のお彼岸中日法要**
午前11時　秋季彼岸会法要
おとき、説教あります。

---

# あとがき

前の号で風邪をこじらせたと書いたらお見舞いのお手紙を何通か頂戴し、ありがたいやら恐縮するやら。結局五月いっぱい微熱が出たりして治り切らず、すっきりしない春先でした。今は快調、ご心配をおかけしました。
回を重ねて第六号、少しはペースがつかめてきたかなという感じはありますが、内容はまだまだ。応援の石田さんが「〃信心〃の欄で紹介する人がいなくなったら？」と心配されたので、「大丈夫、年四回の今のペースで百人紹介するのに二十五年かかるから」と話して二人で大笑いしました。
（小川記）